

1 三輪山 (みわやま)

三輪山はどこから見てもまことに美しい山である。奈良盆地の中央近くに位置しているので、北部の秋篠や南部の飛鳥あたりからもその優美な姿が見える。古くから懐かしい山として万葉集やその他の文学作品にも度々登場した名山である。歴史学者の樋口清之氏はかつて畝傍中学の生徒だった頃のある夜、三輪山の頂上から稜線伝いに麓の社に向って光る玉がゆっくりと下がって行くのを目撃した。そして、知り合いの老人から、それは神様が社へ下がられる徴であると教えられた。第二次世界大戦以前はこの山は完全な入山禁止の「禁足地」であったが、樋口少年は意を決して、こっそりと登山して、中腹と頂上にある古代の壮大な祭祀遺跡である磐座（いわくら）をみて、その神々しさに驚いたという。この三輪山はまた神秘の山でもあった。

現在は禁足地ではなく、希望者は祭典以外の日に、入山料を払って三時間以内の登山が許される。私が参拝したのは五年前のさわやかな五月の始めであった。三輪大社の境内にある狭井神社が登り口である。入山料を社務所で払い、櫛を受取り肩にかけて山に入る。登山道は整備されていて歩きやすい。この神社の神の使いは蛇体なので、道のあちこちには蛇神様を祭る小祠が多い。この山の高さは海拔467メートル、奈良盆地からでも実質400メートルはあるので、遠くからの優美な見かけの姿によらずかなり急な登り道である。多くの参拝者があるので、途中には休憩所もあり、また飲み水が流れる小さい滝もある。中腹より上に巨大な磐座がある。そして、頂上の巨大な磐座の前には奥宮の祠があって、登山者はここで参拝する。

昔の本によると、この山全体が鬱蒼とした原生林の巨樹に包まれていたので、この祠の附近は昼でもうす暗い神秘的な場所であったという。しかし、先年の台風（室生寺の五重塔が倒木のために壊れた時）によって山頂付近の森はほとんどなぎ倒され、現在は明るく見晴らしの良い山頂となって、奈良盆地が一望できる。神秘的な雰囲気はなくなったが、気持ちの良い山頂である。

最上部の磐座で美しい老女がほほえみながら祈っていた。この人が沖縄以外で本土に残る唯一人の巫女（シャーマン）として、司馬遼太郎氏が『街道を往く』のなかの「葛城への道」で紹介した女性である。この女性は三輪神社とは直接には関係がなく、彼女を中心とした信仰団体があるらしい。原始神道とはこのような形なのだろうか。司馬氏は彼女と言葉を交わした。司馬氏の神様に会いましたかという質問に、彼女は古雅な響きをもつ吉野言葉で詠うように、会うことはあるけど、ほんのたまにだけと答える條がなんとも印象的である。つまり、三輪山は何の宗教かはともかくとして、信仰の山としていまだに生き続けているのである。

2 神山（こうやま）へ

さて、上賀茂神社の御神体山である神山もかつては山頂の磐座で巫女（シャーマン）が祈る場所であった。現在の神社はその遥拝所として成立したと座田司氏は『賀茂社祭神考』の中に書いている。御神体山であったのは三輪山が先かこちらが先か、よくわからないが、三輪山は御神体としての存在を今も持ち続けているのに対し、神山はその存在が神社に比べて薄くなっているように思える。第二次世界大戦後、神山国有林として神社から離れてしまったためであろうか。これは樞原神宮と畝傍山の関係と似ている。

『賀茂社祭神考』によれば、上賀茂神社の境内から神山の周辺の山にかけてことごとく秩父古生層の岩塊であり、特に神山の山頂には同質の巨岩が数個密集して露出し、立派な磐座をなしている。山頂にこのような偉大な磐座がある山は附近の山々には存在しないとのことである。三輪山の山頂の磐座の壮大なものにも驚いたが、このように座田氏の述べられた聖地がわれわれの近くにも存在することに強く興味を引かれ、一度参詣したいものと思いつけていた。

禁足地であって、誰も登ることは出来ないと思われていたのだが、昭文社発行の『山と高原地図 48 北山2』には上賀茂終谷町からの登山ルートが示され、登り40分、下り20分と書かれていて、登山愛好者には親しまれている山であることがわかる。

今でも賀茂県主の後裔にとって「禁足地」としての掟のようなものがあるのかどうか、長老の藤木正直さんにお尋ねした。翁のいわく、別に掟のようなものがあるわけではない。自分もかねがね登りたいと思っていたのだが、機会もなくて今に至った。古代の祭祀の遺跡があることは確かで、頂上と中腹に磐座があると聞いている。自分がかつて古老から聞いた話で興味があるのは、これらの磐座の周辺に勾玉が散らばっていて、古代の祭祀で勾玉が供え物とされていたことである。そして、中腹の磐座よりも頂上の磐座のほうがより上等の勾玉が落ちていたことは、古代では身分の高い者だけが頂上の磐座で祭祀を営むことが許されたと想像できるとの御見解であった。現代では祭祀の場ではないので禁足地としての掟はなくなったが、われわれの御先祖の聖地であったことは確かである。

かくて今年（平成15年）、われわれ賀茂県主同族会の面々（NN、FS、NR、FT、IT、の各氏および梅辻諄）は神山への参拝登山を試みた。登山ルートについては京都産業大学の勝矢教授から最も安全なルートを教えていただいたが、それは帰りの経路とすることにして、先ず上賀茂終谷町にある立命館大学の総合グラウンドとクラブハウスの横の道を上がって、谷間から登る道を通った。しかし、この道は実際には現在ほとんど使われていないルートらしく、谷間の小さい道は流水の害で崩れて部分的にしか残っていない。わずかに樹の小枝に青、赤などのビニールテープを巻いてルートであることを示しているが、極めて歩行困難と言わざるをえない。幸い、山のプロであるNRさんの先導で、道なき道を通って稜線に登り着いた。稜線に出てみると、別に小道らしい踏み跡がある。われわれも知らない別の道があるようだ。

そこから頂上までは近い。頂上には自然石を立てた石柱があり、その周囲に石が並べら

れている。附近の樹の小枝にはあちこちの登山クラブの名を書いた小板が紐で結び付けられていて、多くの登山者のあることがわかる。石柱の前に一同が整列し、FSさんの祝詞奏上でささやかながらお祀りをした。頂上は周囲が樹木に遮られて見晴らしがきかない。

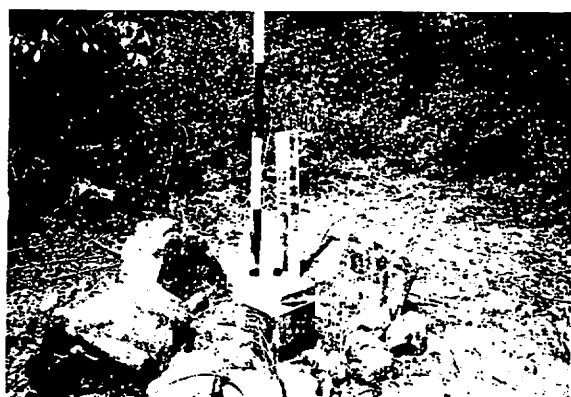
頂上には大きい磐座があるとは真弓さんや座田さんが本に書いている。また、注連縄を張ったその写真をどこかで見たことがあるが、頂上にはそれらしき岩もない。頂上から少し南に下がったところで灌木の藪に囲まれた磐座を発見した（写真）。もちろん今は注連縄もなく、見る影もなく荒れ果てた姿である。これはいずれ営林署の許可を得て、整備されなければならないだろう。ここは神社の所有地ではなく、神山国有林として営林署の管轄なので、もし仮に同族会がこの磐座附近の整備をするにはどのような手続きをすればよいのであろうか。

南側の下り道は京都産業大学のグラウンドやクラブハウスの方に通じる。道が整備されていて、林の中の小道は気持ちよく歩けた。そして京都産業大学の体育館とクラブ部室棟の西端にある散策路に出る。

このように初めての神山の参拝を終えたが、今後 神山に参拝される方はわれわれが下りに採ったルートに登るのが最も安全で容易であるように思える。しかし、この道の登り口に達するには市バスの京都産業大学前で下車し、鞍馬街道の西側にある京都産業大学の体育館の前の階段を昇り、その構内の西端まで通り抜けなければならない。西端には散策路と書いた立て札があり、林の中を通る小道が上に通じている。簡単な地図を示そう。

ただ一つの難点は京都産業大学の構内を通り抜けるのに許可が必要なことである。これはあらかじめ手続きを踏まねばならない。御希望の方は私にご連絡頂いて、私から京都産業大学の勝矢教授に連絡し、同教授から体育館の事務室へあらかじめ連絡を依頼しなければならない。まことに面倒なことであるがこの神山への登山路を同大学が取得してしまったので止むを得ない。

上賀茂神社の境内から望む神山の姿は、奈良の三輪山と同じように美しい。信仰の対象として尊ぶのも大切であるが、われわれの健康増進のための登山としても身近で格好な里山と云える。京都産業大学の構内を通らない別のより良き登山路を探して再びご紹介しよう。



神山 三角点



磐座(?)

